バハイ教と薔薇の花
「あなたの心の花園に愛の薔薇のみを植えよ」

荒井　圭子

バハイ教の書物においては、「薔薇」が、その気高い美しさと甘美な芳香ゆえに象徴として多く用いられている。薔薇は、神の顕示者を象徴するものとして、その美と芳香は、「神の美」と「神の甘美なる芳香」の比喩として用いられる。本発表では、このような比喩としての薔薇の美とその芳香が象徴する「神の美」と「神の甘美なる芳香」とは何であるのか、その特質について考察する。更に、そのような薔薇の美とその芳香が持つ特質を踏まえ、「あなたの心の花園に愛の薔薇のみを植えよ」というバハオラの教えが、個人の心とその人生に持つ意味について理解を深めることを試み、薔薇の木を植えるための土でもある人の「心」とは何であるのか、神が人の心を創造した目的とは何であるのかについて考察する。これらの考察より、「薔薇」を用いることによって象徴されるものは、私達の心と世界を「神の美」と「神の芳香」で満たすよう教えるものであるという理解に至る。

初めに

あなたの心の花園に愛の薔薇のみを植えよ。そしてナイチンゲールが抱くような愛情と願望を失わないようにせよ。正しき者との交わりを大切にし、邪な者との全ての親交を避けるようにせよ[1]。

私は、バハイになってすぐにレズワンの祝祭に参加する機会に恵まれたのですが、その会場は、それは美しく薔薇の花で飾られていました。またその期間中に、バハイの人達と共に美しい薔薇園に行きお祈りなどをしましたので、バハイになったということと薔薇の花は、私の頭の中で強く結びついており、私にとって薔薇の花は特別の存在でした。薔薇といえば、数ある花の中でも最も気高く美しいと思う人は多いことと思いますが、後にバハイのシンボルは薔薇であると聞いた時にも、私も当然のように納得し、特にそのことにどのような意味があるだろうかと深く考えることもなく参りましたので、本日は、タイトルに引用しましたバハオラによる「隠されたる言葉」の中の一節を主題として、バハイ教とそのシンボルとしての薔薇について考察してゆきたいと思います。

バハイの書物には、「薔薇」あるいは「薔薇の園」という言葉が至るところに用いられています。その殆どの場合、それは比喩として用いられ、薔薇といわれて心に浮かぶイメージを借りて抽象的な事柄の本質を表現しています。それでは、「薔薇」あるいは「薔薇の園」によって象徴される事柄の本質とは、何なのでしょうか。まず、比喩としての薔薇を考える前に、実際に薔薇の花が登場する、バハオラが「最も偉大なる祝祭」「祝祭の中の王」「神の祝祭」 と呼ばれるレズワンの祝祭、「楽園の祝祭」について触れ、そこから薔薇が象徴する特質を幾つか引き出してみたいと思います。

楽園の祝祭

バブの宣言から 19 年目の Naw-ruz から、31 日が過ぎた 1863 年 4 月 22 日、バハオラがバグダッドを去るニュースが伝わると、老若男女、あらゆる階層のおびただしい数の人々が、バハオラの家に集まりました。その数が、あまりに多かったために家に入れないほどであったといいます。 町

[1] In the garden of thy heart plant naught but the rose of love, and from the nightingale of affection and desire loosen not thy hold. Treasure the companionship of the righteousness and eschew all fellowship with the ungodly. (Baha'u'llah, *The Hidden Words*, p. 51)

の著名人である Najib Pasha はこの話を聞き、自分の所有する、バハオラの家の対岸に位置するチグリス川の辺にある Najibiyyih という名の庭園をバハオラに提供しました。 バハオラは、この庭園にテントを張り、12 日間留まりましたが、その一日目に、自分こそは過去の全ての聖典に約束されている、バブがその出現を予言していた神の顕示者であることを宣言しました。この庭園は、後に「楽園の園」(the Garden of Ridvan) と呼ばれるようになりますが、実際、薔薇の芳香とナイチンゲールの鳴き声が、美と魅惑の雰囲気を作り出していたといいます。(In *The Revelation of Baha'u'llah*, p. 261)

バハオラの滞在中、毎朝庭師達が、庭園内の並木道に咲き誇る薔薇の花をバハオラのテントの中央に積み上げました。その薔薇の山はとても高かったので、お側の人々が朝のお茶をバハオラと共にするためにその回りに座ると、お互いの顔が見えないほどであったといいます。バハオラは、自らの手によって、その朝去ることになっているお側の者達一人一人に、自分に代わってその薔薇をバグダッドの市内に住む友らのもとに届けてくれるよう託したのですが、この出来事は、バハイ教における薔薇を考える上で非常に象徴的な出来事であると思われます。

そして九日目の真夜中のことになりますが、バハオラはテントから現れ、お側の者達が眠るテントの脇を通り、薔薇の咲く並木を歩きながら次の様に話しました。 その声は、ナイチンゲールの鳴き声がとても大きかったために聞こえないほどであったといいます。

> これらのナイチンゲールのことを考えてみよ。薔薇を愛するあまり、黄昏より夜明けまで眠ることなくそのメロディーをさえずり、燃えるような情熱をもってその崇拝する薔薇と心を通わしている。それなのに何故、最愛なる御方の薔薇のごとき美に心を焦がしていると主張する者達は、眠ることなどできるのであろうか [2]。

この出来事は、冒頭に挙げました「隠されたる言葉」の中の一節が表されてから 5 年後のこととなりますが、この節の意味を理解するのに大変役立ちます。「あなたの心の花園に愛の薔薇のみを植えよ。そしてナイチンゲールが抱くような愛情と願望を失わないようにせよ。」という言葉の中でも特に「ナイチンゲールが抱くような愛情と願望」という表現は、日本人の私達にはすぐには分かりにくいのですが、ペルシャでは、ナイチンゲールが薔薇に対して抱く憧憬がしばしば詩において歌われるということです。また、先に挙げましたバハオラの言葉の中においてバハオラは、「薔薇のごとき美」として自らをまたはその象徴するものを表現しています。

バハオラは、後に書簡の中でレズワンの日々について書いていますが、その中で、自分はその日、それまで人間から隠されていた「美」を覆うベールを引き裂き、神の力によってその栄光を顕示し、その精神の芳香を遠く外国まで振りまくよう自分自身に求めた、と述べています (In *The Revelation of Baha'u'llah*, p. 273)。 このことからも、「美」と「芳香」がバハイ教の中でモチーフになっていることを理解することができます。

また、別の書簡においても、このレズワンの日々のことを次のように述べています。

> 聖なる春が訪れた……これは、全ての甘美なる芳香が、全創造物の上に芳香を振りまいてきた我が衣よりその芳香の源を得た日である……バハの者達よ。古代の日々の舌が口を開いたこの至福の日を思い出す時、限りなく輝く心をもって喜ぶがよい……[3]

ここからも、レズワンの祝祭は、神の「甘美なる芳香」が授けられた至福の祝祭であり、その時顕示されたものは、薔薇のごとき美であることが分かります。それでは、薔薇が象徴するもの、薔薇の

---

[2] Consider these nightingales. So great is their love for these roses, that sleepless from dusk till dawn, they warble their melodies and commune with burning passion with the object of their adoration. How then can those who claim to be afire with the rose-like beauty of the Beloved choose to sleep?" (In *God Passes By*, p. 153)

[3] The Divine Springtime is come.....This is the Day whereon every sweet smelling thing hath derived its fragrance from the smell of My garment. --a garment that hath shed its perfume upon the whole of creation. .....Rejoice with exceeding gladness, O people of Baha, as ye call to remembrance the Day of supreme felicity, the Day whereon the Tongue of the Ancient of Days hath spoken.....(*The Revelation of Baha'u'llah*, pp. 274-275)

もつ美しさとその香りに象徴される「神の美」「神の甘美なる芳香」とは何を意味するのでしょうか。

薔薇が象徴するもの

薔薇

先に述べましたように、薔薇は、しばしば神の顕示者を象徴するものとして用いられています。これは、バハオラの次の言葉からも理解することができます。

> 死すべき鳥達よ。耳を傾けよ。変わることなく輝く薔薇の園において、その花が開花し始めた。その花に比べるならば、全ての花は棘に等しく、その栄光の輝きの前には、美の本質さえも見劣りがし色あせる。それゆえ、立ちあがり、その花の咲く楽園に到達し、朽ちることなき花の芳香を吸い込み、その神聖なるものの甘美な香りを呼吸し、そして、この天上の栄光という香水の分け前に与るよう、努力せよ[4]。

ここでは、今開花し始めた薔薇は、バハオラ自身を指しており、その薔薇の咲く薔薇の園は楽園であると理解することができます。「甘美な芳香」はその聖なる本質を象徴し、「薔薇の香水」は、「天上の栄光」を象徴しています。 また、アブドル･バハの次の言葉からも、薔薇は、神の顕示者を表すことが確認できます。

> 真実の太陽は崇められ従われなければならない。私達はどの茂みからであろうと、東洋の茂みであろうと西洋の茂みであろうと、薔薇の芳香を求めなければならない。どのランタンから輝く光であろうと、光を求める者であれ[5]。

ここでは、キリストやマホメット、ゾロアスターという他の預言者についても薔薇という言葉によってその本質を表しています。では、この「薔薇の美」、「薔薇の芳香」を比喩として用いることに、他にどのような意味があるのでしょうか。

薔薇の美

バハオラは、"…….. every man hath been, and will continue to be, able of himself to appreciate the Beauty of God...."「人は全て、過去においてもまた未来においても、自ら神の美を理解することができる。」(*Gleanings*, p. 142)と述べていますが、「神の美」とは、何を表すのでしょうか。

> 疑いの低き段階を超え、確信の崇高なる高みに登るようにせよ。真理の眼を開けよ、さすれば、覆いなき我が美を見、叫ぶであろう。「全ての造物主の中で最も卓越せし主が崇められんことを。」[6]
>
> 我が美より他のものを見ることのないようにせよ。我が言葉以外のものに耳を傾けることの

---

[4] Hear Me, ye mortal birds! In the Rose Garden of changeless splendour, a Flower has begun to bloom, compared to which every other flower is but a thorn, and before the brightness of Whose glory, the very essence of beauty must pale and wither. Arise, therefore, ...strive to attain the paradise of His presence, and endeavour to inhale the fragrance of the incorruptible Flower, to breathe the sweet savours of holiness, and to obtain a portion of this perfume of celestial glory. (*Gleanings*, pp. 319-320)

[5] The Sun of Reality must be worshiped and followed. We must seek the fragrance of the rose from whatever bush it is blooming---whether oriental or western. Be seekers of light, no matter which lantern it shines forth. (The Promulgation of Universal Peace p. 248)

[6] Pass beyond the baser stages of doubt and rise to the exalted heights of certainty. Open the eye of truth, that thou mayest behold the veilless Beauty and exclaim: Hallowed be the Lord, the most excellent of all creators! (*The Hidden Words*, p. 54, #9)

ないようにせよ。我が知識以外の全ての知識を捨てよ。されば、汝、明哲な洞察力と純粋な心、そして注意深き耳をもって、我が神聖なる宮廷に入るであろう[7]。

これらの節の中で「美」が象徴するものは、精神の目である「明哲な洞察力」が見極める真実あるいは真理であるといえます。 そして、このように、精神の目が神の真実を見、真理を理解した時始めて人間は、神を称えることができるのだと思われます。
また、バハオラは次のようにも述べています。

左の方角に目を向けると、光の柱の上に立ち、次のように叫ぶ最も崇高なる楽園の美の一人を見た。「天と地の住人よ。我が美を見よ。我が輝き、我が顕わすもの、我が光彩を見よ。真実の神にかけて言う。我は、信頼であり、その顕わすものであり、その美である。我は、我を固守し、我の地位を認め、我の裳裾を硬くつかむ者全てに報いるであろう。我は、バハの人々を飾る最も偉大なる装飾であり、創造されし王国に住む者全てに対する栄光なる装束である。」[8]

この義務（ティーチング）を実行しようと立ちあがる者は、その言葉が受け入れる用意のある人の心を引きつけるよう、そのメッセージを称える前に、まず、自らを高潔で賞賛すべき人格という装飾で飾らなければならない[9]。

世界を神の恵みで装飾せよ[10]。

これらの箇所では、人を装飾し、世界を装飾するものとしての「美」が言及されています。 物質世界においては、装飾というとあくまでも別の実体を美しくするための飾りとして、必ずしも必要ではない場合もありますが、ここでは、精神の目に美しいもの、人や世界を精神的に美しくするために不可欠のものであることに留意する必要があります。 精神の眼にとって美しいもの、すなわち「神の美」とは、ここでは「信頼」に代表されるような美徳を指しています。 それを備えた「高潔な人格」とその美を反映する立派な行為は、個々の人間を美しく飾り、世界を美しく飾るものであり、そのような人、そのような世界は、薔薇のようであり、薔薇の園のようであると言うことができるでしょう。

薔薇の芳香

先に「薔薇の芳香」は、「聖なるものの本質」を、「薔薇の香水」は、「天上の栄光」を象徴するものであると解釈しましたが、「薔薇の芳香」または「香水」という言葉は、他に何を象徴するのでしょうか。

導かれた道を歩み、高潔という高みを極めようと努める人が、この栄光ある高き地位に到達したならば、何千里の彼方からであっても、神の芳香を吸い込むであろう[11]。

---

[7] Blind thine eyes, that is, to all save My beauty; stop thine ears to all save My word; empty thyself of all learning save the knowledge of Me; that with a clear vision, a pure heart and an attentive ear thou mayst enter the court of My holiness. (*The Hidden Words*, p. 55, #11)
[8] Turning then to the left We gazed on one of the Beauties of the Most Sublime Paradise, standing on a pillar of light , and calling aloud saying: O inmates of earth and heaven! Behold ye My beauty, My radiance, and My revelation, and My effulgence. By God, the True One! I am Trustworthiness and the revelation thereof, and the beauty thereof. I will recompense whosoever will cleave unto Me, and recognize My rank and station, and hold fast unto My hem. I am the most great ornament of the people of Baha, and the vesture of glory unto all who are in the kingdom of creation. (*Tablets of Baha'u'llah*, p. 122)
[9] Whoever ariseth to discharge this duty (teaching), must needs, ere he proclaimeth His Message, adorn himself with the ornament of an upright and praiseworthy character so that his words may attract the hearts of such as are receptive to his call. (*Gleanings*, p. 334)
[10] Adorn, then the world with the ornament of the favors of Thy Lord. （In *God Passes By*, p. 154）
[11] Were he that treadeth the path of guidance and seeketh to scale the heights of righteousness to attain unto this glorious and exalted station, he would inhale, at a distance of a thousand leagues, the fragrance of God.

バハオラのこの言葉から理解されることは、「神の芳香」は、薔薇の芳香の如く強力で、遠方からでも認めることができるということであり、それは、神の教えに従い、高潔という高みを極めようと努力する人こそが吸い込むことのできる芳香であるといえます。では、このような、遠方からでも認めることのできる神の芳香とは何を指すのでしょうか。

> この探求者の洞察力は大変優れたものとなり、あたかも太陽と影を区別するかの如くに真実と偽りとを識別するようになるであろう。 もしも彼が西洋から正反対の東洋の端に住んでいようとも、西洋の彼方の端より神の甘美な香りが漂ったならば、必ずやその芳香を認め、吸い込むであろう。同様に、彼は、神の素晴らしき言葉と神のなさること、神の威力ある行為という神のしるしを、人の行い、人の言葉、人の生き方から識別するであろう。あたかも石と宝石を識別する宝石商のように、あるいは人が春と秋を、熱さと冷たさを識別するかのように。人の魂のチャンネルが、この世の全ての執着から清められた時、計り知れなき遠方からであっても、必ずや最愛なる御方の息に気付き、その香水に導かれ、やがて確信の都に到達し、その都に入るであろう[12]。

ここでは、「神の芳香」とは、偽りから識別される「真実」であり、神のなさること、神の言葉という「神のしるし」であると理解することができます。 これらを他のものから識別してその芳香を吸い込むためには、精神の感覚という芳香の通り道を清める必要があり、それには、魂を「この世の全ての執着から清め」開放することが求められます。このことは、次のアブドルバハの言葉からも理解することができます。

> あなたが一旦精神の感覚をこの世の汚れより清めたならば、天上の至福に満ちた茂みより運ばれてくる神聖なるものの甘美な芳香を吸い込むであろう[13]。

このように、薔薇の芳香は、聖なるものと真実というこの世に現される神のしるしを象徴するものであり、それは、この世の執着から清められた精神の感覚をもつ人には、遠方からでも認めることができ、吸い込むことのできるものであるといえます。

薔薇の香りに包まれる

アブドル･バハは、"The happiness of man is in the fragrance of the love of God."「人間の幸福は、神の愛の芳香に見出される。」(*The Promulgation of Universal Peace*, p. 185)と述べていますが、これは「薔薇の香りに包まれる」という日本語の表現するものに近いように思われます。神の真実を認め、それを愛し崇めるということは、偉大なるもの、高貴なるものに包まれることであり、それは、甘美な薔薇の香りに包まれるような幸福感に喩えることができるのではないでしょうか。 「薔薇の香りに包まれる」と同様の表現を、神の言葉についての記述の中にも見ることできます。

(*Gleanings*, pp. 266-267)

[12] So great shall be the discernment of this seeker that he will discriminate between truth and falsehood, even he doth distinguish the sun from shadow. If in the uttermost corners of the East the sweet savours of God be wafted, he will assuredly recognize and inhale their fragrance, even though he be dwelling in the uttermost ends of the West. He will, likewise, clearly distinguish all the signs of God--His wondrous utterances, His great works, and mighty deeds--from the doings, the words and ways of men, even as jeweller who knoweth the gem from the stone, or the man who distinguish the spring from autumn, and heat from cold. When the channel of the human soul is cleansed of all worldly and impending attachments, it will unfailingly perceive the breath of the Beloved across immeasurably distances, and will, led by its perfume, attain and enter the City of Certitude. (*Gleanings*, p.267)

[13] When once thou hast cleansed the channel of thy spiritual sense from the pollution of this worldly life, then will thou breathe in the sweet scents of holiness that blow from the blissful bowers of that heavenly land. (*Selections from the Writings of Abdul-Baha*, pp. 184-185)

汝自身を我が言葉の大洋に浸すようにせよ[14]。

神の言葉に身を浸すということは、精神を神の真実で包み、その甘美なる芳香に包まれることであり、それは、あたかも薔薇の香りに包まれるような幸福感を人にもたらすものであると言えるでしょう。

「あなたの心の花園に愛の薔薇のみを植えよ」

それでは、薔薇が象徴する事柄について考察してまいりましたので、ここで、タイトルに挙げました一節の意味を考えてみたいと思います。 心の花園に植え、ナイチンゲールが抱くような愛情と願望をもって育てなければならない愛の薔薇とは、何を象徴するのでしょうか。 まず、「愛の薔薇」を植える土である人の心について書かれたバハオラの言葉をみてみましょう。

> 神は、世界の全てのものの中から、神の僕である人の心を選び、その一つ一つを神の栄光の現れるところとした。それゆえ、その心に造られた目的であったものが刻み込まれるよう、心をあらゆる汚れより清めよ[15]。
>
> 天と地にある全てのものを我、汝のために定めた。但し人の心は別である。我は、人の心を、我が美と栄光の住むところとした[16]。

これらの言葉より、人の心は、その心をもつ人間に、神が、自らの美と栄光が住むところとして託したのであり、その美と栄光が人の心に現れるためには、神より託された心を清め、美と栄光の現れる場所に相応しいものとしなければならないということが理解できます。 神が人間に心を託したこと、また、その心を清めるということに関して、バハオラは、別の箇所で次のように述べています。

> 我が僕よ、もしも汝が、我が、いかなる寛大さと恵みをもって、汝の心を委ねたかを理解することができたならば、汝は、真実にかけて、この世の全ての物に対する執着を振り払い、汝自身の真の知識を得るであろう。汝自身の真の知識とは、我が存在そのものを理解することと同じである……おお、我が僕らよ。我は、神の永遠なる大洋の深みに隠された真珠を取りだし汝らに明らかにした。 我は、天の乙女をそのベールの後ろより姿を現わすよう呼び集め、完全なる力と英知をもつ我が言葉からなるこれらの言葉の衣服を纏わせた[17]。

このように、神は、大いなる恵みと寛大の心をもって人に心を託したのであり、その心は、顕示された神の言葉を理解することによって、全ての物に対する執着を振り払い、自分自身を理解して、神が創造された本来の目的である神の栄光と美の宿るところとなり得るということです。

このような観点から考えてみますと、タイトルに引用しました一節は、神より託された自分の心を清め、薔薇の木を植えるかのごとく、神の言葉を理解して信仰し、その薔薇の木を「ナイチンゲールが抱くような愛情と願望」をもって崇拝し、育てなければならないということであるように思われま

---

[14] Immerse yourselves in the ocean of My words. (*Gleanings*, p. 136)

[15] He (God) hath chosen out of the whole world the hearts of His servants, and made them each a seat for the revelation of His glory. Wherefore, sanctify them from every defilement, that the things for which they were created may be engraven upon them. (*Gleanings*, p. 296)

[16] All that is in heaven and on earth I have ordained for thee, except human heart, which I made the habitation of My beauty and glory. (*The Hidden Words*, p.66, Persian #27)

[17] O My servant! Could ye apprehend with what wonders of My munificence and bounty I have willed to entrust your souls, you would, of truth, rid yourselves of attachment to all created things, and would gain a true knowledge of your own selves - a knowledge which is the same as the comprehension of Mine own being .....O My servants! I have brought forth and revealed unto you the pearls that lay concealed in the depth of His everlasting ocean. I have summoned the Maid of Heaven to emerge from behind the veil of concealment, and have clothed them with these words of Mine-words of consummate power and wisdom. (*Gleanings*, pp. 326-328)

す。「ナイチンゲールが抱くような愛情と願望」とは、「確信の水」であるとも言えるでしょう。

> 汝の心の清き土に我が聖なる英知の種を蒔き、確信の水を注ぐようにせよ。されば、我が知識と英知のヒヤシンスが汝の心の聖なる都に鮮やかに青々と芽生えるであろう[18]。

このように確信の水を注ぎ、また「正しき者との交わりを大切にし、邪な者との全ての親交を避ける」ことにより、すなわち、何事にも惑わされることなく、バハオラによって示された正しい道を歩むことにより、心に植えた薔薇を美しく開花させることができるものと思われます。従って、「あなたの心の花園に愛の薔薇のみを植えよ」という言葉は、「神を信仰し、あなた自身を、精神の目にとって美しいもの、すなわち真実と美徳、そしてそれを反映する美しい行いで飾り、薔薇のように美しく芳しくあれ」というメッセージであるようにも思われます。自分の心に、美しく芳しい神の知識と真実という信仰の薔薇の木を植えるということは、心を清め、その心が理解する神の知識つまり神を愛することであり、それはまた、自分自身の心を神より託されたものとして愛することであり、また同時にそれは、神より託された他の人々の心を愛することでもあると考えることができます。 従って、「愛の薔薇」とは、神を愛し、神が託された人々の心を愛することでもあると言えるでしょう。

終わりに

以上の観点より、神を信仰し、その教えを人々に伝えるということを考えてみますと、それは、神より託された人々の心に神への愛という信仰の薔薇の木を植えることを助け、自分自身と人々の心に美しい薔薇の木を育てることであり、世界を美しい薔薇で飾ることを助けることであると捉えることができます。 未だ世界には、神の美とその芳香に包まれた真実の幸福と繁栄がもたらされているとは言えませんが、やがて、心に植えられた愛の薔薇を育てる一人一人の努力によって、世界が美しく芳しい薔薇園のように、レズワンの庭園のようになることを希望したいと思います。 それが、バハオラがレズワンの日々に、彼に従う一人一人のもとに薔薇の花を託した意味であったのではないかと思われます。

引用文献

Abdu'l-Baha. *The Promulgation of the Universal Peace. Talks delivered in the United States and Canada in 1912*. English translation given during the talks. Wilmette: Baha' i Publishing Trust, 1982.

——. *Selections from the Writings of Abdu'l' l-Baha.* Comp. the Research Department of the Universal House of Justice. Trans. A Committee at the Baha'i World Centre and Marzieh Gall. Haifa: Baha'i World Centre, 1978.

Baha' u' llah. *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah*. Trans. Shoghi Effendi. 1st pocket-size edn. Wilmette: Baha'i Publishing Trust, 1983.

——. *Hidden Words of Baha'u'llah.* Trans. and arranged by Shoghi Effendi.Wilmette: Baha'i i Publishing Trust, 1982.

——. *Tablets of Baha'u'llah Revealed after the Kitab-i-Aqdas.* Comp. The Research Department of the Universal House of Justice and trans. by Habib Taherzadeh with the assistance of a Committee at Haifa: Baha'i World Centre, 1978.

Revelation of Baha'u'llah: The Revelation of Baha'u'llah: Vol. 3, 1868-1877. Oxford: George Ronald, 1983.

Shoghi Effendi. *God Passes By*. Baha'i Publishing Trust. Wilmette: Illinois. 1995.

[18] Sow the seeds of My divine wisdom in the pure soil of thy heart, and water them with the water of certitude, that the hyacinths of My knowledge and wisdom may spring up fresh and green in the sacred city of thy heart. (*The Hidden Words*, p. 71)